

研究通信

No. 45

1963.12 刊
会局研究会
村社会務
東京都港区芝三田
2ノ2 大学室
農三 勉研義
オ

「村研の今後にについて」

中野 卓

村研のありかたにつき充分考えなおしてみる必要のある時期に来ていると思います。こういう時には次の二つの点を考え合せること大切ではないでしょうか。ひとつは、われわれが村研をどういう趣旨で結成し、どこに魅力をおぼえて来たかという点です。もう一つは、その後、どういう変化が、われわれの研究対象や研究条件などに生じたかという点です。現在の村落を対象とする場合、その変化は著しく、研究関心、研究方法にも変化はありますし、また対象が戦前の、また近世の村などに選ばれている場合なら対象 자체には変化がないといえども、その取上げ方は変化がありえましょう。さらに、戦後もない頃と今とではそれぞれ別な所属学会の活動も活潑となり、それとの関係における村研のメンバーの研究条件に

も変化があることも無視できないことでしょう。

しかし、当初より、私など社会学に属する者の一人としては、経済史や経済学の方面の専門家によつておこなわれた村落の調査研究の報告を直接その人々からうかがひ、うちわつて素朴にすぎるかもしれない疑問を出しても、まともにそれに答えていただき、討論もできるといふところに大きな魅力があつたのでした。もし思い上がりなどとすれば、経済学・経済史の方の人々も、その逆に、同様な魅力を村研に見出して来て下さったのではないでしようか。

その場合、現在の村と共に過去の各時代の村も報告の対象としてとりあげられ、地方による差も考えられてきました。
くづれにせよ

さまざまなかつて、日本の村落社会が示してきた発展、時代から時代へ継承されつつ、変化してきた日本村落の構造機能における性格如何は、村研における中心的な共通の関心となつてきただけでないでしょうか。また、村研の共同研究の方法で特色となつてきたのは何かといえば、各人が夫々の立場からおこなつた事例研究をしながらでないでしょうか。あくまでも、各人が夫々の立場からおこなつた事例研究を一つ一つ寄つて、共通の素材となしうるようにそれを提示し、それをとりあげるについての理論的枠組なり、これにともなつた分析方法なりにまで及んで討論がかわされるところに村研の方式があつたのです。

対象は村落社会であつても、そのあつかわれる時代はさまざまです。現在の村を目の関心の中心におく者も、過去の村についてより深く知ることを必要と考え、またその逆でもありました。方法もまた社会学・経済学のいづれのなかでも多様であり、その多様な接近か

ら学び合おうとしたままでした。

ところが、年報を継続して時潮社から出してもらえる条件として、特集テーマにし得ることが必要となり、また現在のトピックを追うような傾向も生じました。それだけでなく、村研の趣旨として事例研究を持ち寄るという点についても、先の点と同様に、出版事情の制約が増大するにつれて次第にむつかしくなってきました。年報刊行の条件が年々の共同課題、大会の報告内容を制限しがちになり、編集の任に当つて下さつた方々の苦労も多分にそこに生じたようあります。

学術的なものなら条件をつけないと書つて下さる出版社があるとう新しく状況に立ちえたということですから、村研は会員一人一人が、最近大会に出席されない人々をも含めて、どのような研究関心をもつておられるかを確かめ、ともに村落社会の研究に関心を持つかぎりの人々が心おきなく参加でき、たがいに学び合えるような大会をもち、その成果が年報に載るというのが望ましいのではないでしょうか。また、拡大委員会が結果的には縮少してしまわないようだ、一定の委員会を編成した方がいいにも思われます。新しい方針が確立するまで、この一年だけではなく、少くともまず一年ほどでも、専務局を慶應でやつていたところはできないものでしょか。